

エカタの夢（1985 夏）

中沢真三

「出逢いまで」

‘84年4月から’86年8月までネパール王国の地方開発省という官庁に所属、水道プロジェクトエンジニアとしてUNICEFとネパール政府合同のチームで働いていました。当時の協力隊ネパール隊員手当は240ドル（1ドル180円時代）、世界の協力隊が派遣される途上国の中で2番目に手当の少ない国でした。手当が少ないというのは、つまり通貨レートが安い、国際競争力が低いと言うことで、それだけインフラが未整備であり、国自体の貧しさを示しています。

さて、その世界に名だたるネパール国の中でもより生活条件が厳しい、電気・ガス・道路などおおよそほとんどの社会資本が整備されていないヒマラヤの麓の村に住み、山奥の谷川から村へ導水する簡易水道プロジェクトのエンジニアが仕事です。

「エンジニア」とかっこいい職名をもらっても、毎日毎日山道をてくてく歩くのが仕事、水源から末端の集落まで標高差が約2千メートルのプロジェクトです。水道用管路はポリエチレンパイプのφ90mmからφ16mmを使います。ちなみに自分の職責は「プロジェクトマネージャー兼エンジニア」でとりあえず現場で一番偉い！ 部下のネパール人テクニシャンの給料が1000RS（1ルピー＝当時約10円）。これと比較すると約4倍（！）の高給取り。といっても村の中では使い道がありません。村の家々で作るヒエ焼酎のロキシーと、地鶏を探してスタッフとの食事に提供するのがほとんど唯一の贅沢でした。ヒエとトウモロコシ、ジャガイモが主食の山村では白いご飯そのものがごちそうです。

この村ではどんなに偉くても、どんなに金持ちでも移動手段は徒歩。とほとほと言ってもどうにもならず。馬の走れる道也没有。馬がいても私は乗れません。で、毎日歩きに歩いていました。

一般の村人が工事の労働者ですから、農民である彼らは畑の仕事が忙しいと誰も掘削工事には出てきません（労働奉仕式プロジェクト）。遅れに遅れる工程をそれでも何とかまとめて、本来乾期の間には終わらせる工事が、雨期のはしりの5月の雷雨の中でやっと竣工式ということもありました。2年の任期を4ヶ月延長した理由は担当工事が終わらなかったせいです。

パイプライン延長は支線も入れて約10km。農民が畑で使う鎌や小鍬をフル稼働して約1mの深さまで掘る掘削工事をご想像ください。ヒマラヤの山中ですから土を掘るとすぐに岩が出ます。鍬や鎌では岩に勝てませんから、ぐるりぐるり迂回に次ぐ迂回でパイプラインの脱出ルートを探すのですが、昔は海だったヒマラヤ山麓には一面が岩盤と言うこともよくあり、最後はポリエチレン管の埋設をあきらめて、

この岩盤上に鋼管をコンクリートで固定します。高価な鋼管はGIパイプと呼ばれ、一週間かけてインドから運びます。長さ4mの管輸送もちろん人力。工事用資材は、ほかにネパール製セメントやポリエチレンパイプなど。途中、幅1mもないような崖の道や、急流にかかる竹の橋を危うくバランスをとりながら、老若男女村人総出の資材輸送です。屈強な村の若者はセメント2袋（100kg!）を担いで、稼ぎます。みんな、険しい山道を1週間のキャラバンです。ラグビーをやっていて腕力には少し自信がある自分でしたが、セメント一袋を担いでも三歩も進めず。女性でも担ぐのにと村人の苦笑を誘いました。

キャラバンが到着する水道プロジェクトの、ワプサカニ村の中にひととき目を引く彼女が……。

「エカタ・ライ」

協力隊活動1年目の担当村はバーサ村とワプサカニ村の2プロジェクト。ヒマラヤからの雪解け水を集め遠くインド洋まで続くドゥードゥコシ（ミルクのように白濁した川）が鋭く切り裂く東西両岸の急斜面にはり付く2つの村です。エカタは、町からより遠い、東のワプサカニ村がふるさとです。

ワプサカニ村水道プロジェクトは、テクニシャンと呼ばれる3名のネパール人技術者、1名のコック、それに私の5名で村の民家の離れ（倉庫）を賃借し、オフィス兼宿泊所とする、プロジェクト完了までの半年間の滞在です。基本的な業務は、川向こうに遠く見える両岸の村のプロジェクト管理ですが、しかし、私の担当はこの2か村だけでなく、翌年度のプロジェクトのための郡内他村の可能性測量や詳細測量そして、遠くタライ地方ピラトナガール市ユニセフヘッドオフィスでの設計・積算業務、また、過年度に完工した近隣村の水道のメンテナンスなどで県内を東へ西へ移動する毎日。2・3週間ほどのサイクルで村へ戻る道は、ドゥードゥコシの恐怖の竹橋から標高差1000m、3時間の登りが待っています。

疲労困憊でたどり着くと、敷地内の母屋からエカタがやってきて、

「サーブ！技師先生 ランムロサンガようこそ無事で帰られました。お茶を アウヌバヨ。おのみ下さい チヤ カノス！」

と、こぼれんばかりの笑顔で迎えてくれる。疲労の極限での山道からの滑落や辿り着かずの遭難危機も、この笑顔があればこそ乗り越えられた、と思ったこともありました。日本人に近いモンゴル系の黒髪と大きめの黒い瞳、理知的なひたいが美しいひとでした。

はじめて出逢ったときは、私を山の民シェルパ族と間違えて、

「この人はシェルパの顔をしているのになんてネパール語が下手なの

だ」

と、うさんくさく思ったそうですが、18歳の麗しい乙女に出会った27歳の独身男性の抱いた好意に気づいたのでしょうか、私の出張からの帰宅にはいつも母屋の彼女の笑顔とお茶が待っているようになりました。

町の高校を終えて、SLCという日本の大検と公務員試験を兼ねたような大事な試験に向けて自宅で勉強中のエカタは、プロジェクトで水道を作る予定の小学校の英語代用教員でもありました。そして、そのときにはもうネパールでは女性がみな嫁入りする年齢にもなっていたのです。

「村祭りの夜」

私のときめきはその年の祭りの夜まで続き、そして終わりました。あまりに時間は短かく、そして知合うのが遅かったのです。

久しぶりに帰ったワプサカニ村の祭りの夜。家の庭から下に見える村人の踊りをスタッフと一緒に見ていると、そばの暗がりからエカタが私を手招きしていることに気づきました。私のときめきは最高潮に達し、人に気づかれぬように彼女のあとをついていくのが精一杯です。近づいた私に暗がりでもわかる笑顔を作って、それでも、念を入れて私に耳打ちするエカタから伝わる息遣いとせっけんの香り！

「サーブ、わたし隣村の村長の息子と、来月結婚することになりました」笑っている顔が、実はこわばっていたことによろやく気がつきました。一瞬黙ってしまったあと、多分聞き間違えたのだろうと、再度問い返すも同じ。あまりにも会い、話し、確かめるふたりの時間が少なく、何でこんな急な話をするのだろう、ネパールってなんて国だ。親が決めた結婚で本当にいいのか。恋愛もさせてくれないのか。ちょっと待ってくれ。頭の中はぐるぐる回っていましたが、自分の口から出たのは、

「コングラチレーション、おめでとう。よかったね。」

「ありがとうございます……。結婚式には出てください。」

エカタはそれっきり振り向かず、暗い中を駆け出して行き、そのあとを、ぼんやりと長いこと見ていました。そうだ、前のあのことだろう。あれが失敗だったのだ。前回のワプサカニ滞在中にエカタを誘って、村はずれで彼女の写真を撮ったとき、エカタの弟が大きな声で姉をからかっていたことを思い出しました。そして、そのあと測量に行くための出発のとき、

「今度はいつ帰ってくるのですかサーブ？」

とさびしそうに言う娘を見ていた母親が確かめるような目をしていたことを思い出しました。いろいろ面倒なことになる前に、以前から話があった近くの村の縁談を決めてしまおう。と親が思ったのに違いありません。

しょうがないさ、自分は遠くから来た異国人なのだから。あきらめが肝心。そして、空白感とさびしい気持ちを整理できずにいた1ヶ月が過ぎ、ついに、運命の結婚式がやって来ました。

「ライ村の結婚式」

JOCV隊員はその任期中は結婚が許されず、隊員活動を終え、帰国して一般人となってから初めて結婚が可能になります。仮に、エカタの結婚に横やりを入れたとしたら、彼女をフィアンセとして宣言することになり、日本に連れて来ることになります。規則違反になるし、第一、知合ってから期間が浅いのにそんなふんぎりはつけられません。「おめでとう」というだけです。

そう考えながらも、頭の中を時々虫が飛び交うような何とも言えない、落ち着かない気持ちのまま、ついに、エカタの結婚式を迎えることになりました。仕事を口実に別の村に出かけ、純粋な気持ちで祝うことができないエカタの結婚式を見ないですませることもできたのですが、家主でもあるエカタの両親とエカタ本人から必ず出席するように念押しされており、当日は村にとどまっていた。

人がぞろぞろ、ぞろぞろ、朝早くからワプサカニ村とムックリー村の人たちがエカタの家の周りに集まりはじめ、次第ににぎやかな踊りと唄が始まります。村人はエカタの家を中心に、向こう三軒両隣は言うに及ばず、遙か下方の段々畑までを埋め尽くします。みんなで食べて飲んで唱って踊る一泊二日の大宴会です。踊りと唄はプロのグループが呼ばれ、それを生業としている彼らの出演料は村人からのチップです。我らユニセフスタッフからも、かなりのチップを渡すことになってしまいました。

とりあえず、地酒で酔うことに決め、村人に囲まれ祝福されるエカタを月とランプの明りの下、遠くから見っていました。スタッフたちと飲んで踊っているうちに、いつの間にか正体がなくなり、翌朝は近所の家の軒下で目が覚めました。朝焼けの光の中、ヒマラヤのパノラマを背景に、唄と踊りが続いていましたが、そのうちに静かになり、宴会場は花嫁が家を出る前の最後の食事に切り替わりました。

皆が待つ中、伝統的なライ族の嫁入り衣装に飾られ、気高く凛々しく美しいエカタが現われました。額に村の長に嫁ぐことを示すティアラが輝き、ほんとうに魅せられてしまいました。まるでローマの休日のオードリーです。しかし、どうしてか私とはほとんど視線を合わせません。そのうちに静かな朝の会食が終わり、いよいよ出発するエカタにカメラを構えた私に、やっと視線を合わせた彼女の頬に涙が流れ始めました。ファインダー越し

に

「元気で暮らさない。幸せになるのだよ」

と、小さく別れをつげました。私のその声は彼女には聞こえないはずなのに、次の瞬間、見る見るあふれ出す涙をぬぐいながら、きっぱりと視線を外し、小走りに嫁入りキャラバンの列に入りました。そのとき、私は、彼女が今までわたしに持っていた愛情を感じ、そして、その気持ちを永遠に心の底に閉じこめたということがわかったのです。

「義理と人情」

エカタの結婚式も終わり、水道エンジニアの仕事が再開しました。2つの村で工事監督を掛け持ちするほかに、次の村のユニセフ水道プロジェクト準備で、調査や測量に飛び歩く毎日が続きます。ただただヒマラヤの山道を歩くだけの移動は体力勝負のハードな仕事でした。道案内の必要性により、その出張は一人のこともあればネパール人部下と一緒にこともあります。

ネパール山間部の出張旅行はその村々の知人宅に泊めてもらう一宿一飯の義理人情の世界です。特に、ユニセフの可能性調査の出張は、その村々の水道プロジェクトへのニーズの度合いにより、村に滞在するチームには心のこもったご飯が用意され、そして、村の貴重な鶏がつぶされます。「水の苦労」が大きい村はこのプロジェクトの実施が死活問題なのです。日本で考えれば公正な調査結果につながらないやり方ですから、これには最後まで違和感を持っていました。村の人たちの調査協力への直接負担が大きいわけですから。初めは自分だけでも出来るだけ宿泊食事代を渡そうとしていましたが、村長さんはじめ、受け取りません。帰り際に滞在先の主婦にこっそり食費を渡したりしました。また、近くにホテル（といっても東海道53次の旅籠のような）があれば極力利用することにしていました。しかし、ネパール人スタッフの考えは違います。

「この村の村長は知人だからお金はいらぬ。彼らが自分の村に来たら自分の家で同じように泊めてあげるのだから気にしなくてよい。」

と言います。日本からきて2年間だけしかこの国にいない自分はお返しすることができないのですから、彼らとは別にすべきだと考えていました。しかし技術的なこと以外は、地元のかれらが主導権を持つべきです。といいながら、やはりイヤなことはイヤで、任期の後半になり山道の案内が分かってからは、可能な限り一人で出張することにしました。犯罪などの心配がいない地域ですが、道に迷い遭難することや崖からの転落事故などの危険性はありましたから、あまり得策ではなかったのですがとにか

く気楽でした。ただ、それが本当に正しかったかどうかは分かりません。村人の心づくしの料理をありがたくいただいて、水の苦勞を聞いてあげて、もしプロジェクトが不可能なら村人を慰め、そしてプロジェクトが決まったら一緒に喜び合える。そのことが本当の「もてなしの心ともてなしに応える心」だったのかもしれませんが。

「1985年夏」

エカタのまだ若い夫が、香港の英国傭兵部隊に入隊するために村を出ました。結婚前から予定されていたことで、姑が病気がちだったことで「家事手伝いの労力もほしいので香港に行く前に」急ぎの挙式となったのだそうです。とにかく妊娠した彼女を置いて3ヶ月後に夫は香港に行ってしまいました。

1985年夏、任期2年目となり次の担当のデウサ村プロジェクトが始まっていました。デウサ村はエカタの嫁いだムックリー村の隣町です。時々、遠くからお腹の大きな彼女がなれない畑仕事をしていることを見ることもあり、体調がよくないことを入づてに聞いたりして、心配していました。そのころ、エカタと道で会い、立ち話をする機会がありました。少し顔色が悪く、目眩がするという彼女のために、携行薬品箱からビタミン剤を数錠渡しました。その数週間後に会ったとき、追加のビタミン剤を欲しがる彼女に、

「こんなものにばかり頼らないで、きちんと食べて栄養をつけなければいい子が産めないよ」

と、少し強く注意してしまいました。エカタは笑って頷いていましたが、今から考えると余計なことを言わずにビタミン剤など瓶ごとあげていればと思います。そのあと、エカタは寂しい顔にもどり何も言わずに畑に行ってしまいました。学校の成績がよかった彼女は親から畑仕事をさせられていなかったことで、嫁ぎ先では無理をしていたようでした。その後音信が途絶えていました。

「ソールソーレリ町」

ソールソーレリはこの郡の役所がある町（実質は村）です。2500mほどの高い標高にあるこの地方のシェルパ族の中心地です。担当工事の予算はこの町の銀行から、自分と郡の建設部長のサインで引き出すことが出来ます。一見単純に思えるこの仕事は実は大変な労力をとまなうことがあります。つまり、予定された日時にネパール政府からの入金がない事、建設部長がどこかに行ってしまい、いつ戻るか分からないことがあること、

また、銀行の担当者がいなくて引き出しできないことなど、開発途上国にある問題がしっかりあります。そのためにこの町のホテルに3日間ほど滞在することもよくありました。

デウサ村やムックリー村からこの町までは標高3500mの峠越えがある半日の道です。楽な道ではありませんがこの町には郡で唯一の病院があり、ネパール人医師がいます。村の病人が数人のキャラバン隊で担がれてこの病院に運ばれるのを道でよく見かけました。ただし、産婦人科も兼ねているといえ、男性医師であり、女性は病院の出産よりそれぞれの村で「取り上げばあさん」に頼っていました。

「19歳の別れ」

それは、彼女の出産も間近になっていた頃のことです。工事予算を引き出すためにソーレリに滞在していました。仕事を終え、次の朝は村に戻る予定にしていました。村では食べられない「モモ（ギョーザ）」とヒエ焼酎をシェルパホテルのサフジ（主人）を相手に楽しんでいた時のことです。

「サーブ、ところでムックリーの村長の嫁が入院しているのを知っているかい？」

「エカタのこと？あれ？結局病院で産むことにしたのかな？」

「違うよ。もう村で産んでいるんだよ。でも、死んで生まれて、母親はそのまま意識がなくなって昨日病院に担ぎ込まれたんだよ。生んだ後で赤ん坊の泣き声がしないので、“わたしの赤ちゃんはどうしたの？何で泣かないの？”と半狂乱だったそうだよ」

「うそだろう。前に会ったときは、そんなに調子は良くないけどお腹の子どもはよく動くよ、と言っていたばかりだよ。そんな馬鹿なことがあるものか」

「なんだか逆子だったとかで、対処が出来なかったそうだよ。でもネパールじゃよくあることさ。ネパールの女はいっぱい苦勞を背負っているんだよ」

途中から話に加わったサフニ（女主人）が仕方ないというようにため息をつく。酔い覚ましの水を頼み、しかし水を飲み干す前に酔いは醒めてしまい、歩いて20分の暗くなりかけた道を病院に急ぎました。なんで昨日教えてくれなかったんだよ。

ランプがともる病院のベッドでエカタは眠っていました。付き添いのエカタの叔母によると、死産のショックで意識が戻らず、病院に着いて一度目を覚ましたときに暴れたので点滴管がはずれてしまったとのことでした。

た。叔母が昨晚は一睡もしないで手を押さえていたそうです。ほかに身内が来ていないので疲れが見える叔母の代わりに、その夜の付き添いをする事にしました。ベッド脇の椅子に座りながらいろいろなことに怒りを感じていました。嫁ぎ先の村長宅からは誰も来ていないこと、夕方からは回診しない病院の医師、点滴だけの治療しかないこの状況をどうすることもできない自分に。

村の人の話では出産の後から出てくる胎盤？が残ったままだったそうです。エカタのショック症状が治療方法を制限したのだろうが、そのぐらいの治療が出来なくて病院といえるのか？もどかしさでいっぱい夜が過ぎます。

「ここが日本だったら。こんなことにはなっていない。なぜ何もできない」夜半、昨日からの看護の人たちが寝てしまい、ひとりでエカタの顔を見ていたら涙が出てきました。エカタの顔に生気が無くなりかけています。S L C 試験に合格して英語教師の道を歩み始めようとして時に、親の決めた結婚で出産。そして19歳の生涯を閉じようとしています。いっぱい旅行をしたい。日本にも行ってみたい。いろいろあった彼女の夢は、そして人生は何だったの？

「すまなかった。友だちとして君に何もしてあげられなかった。」

と小さい声で言ったとき、ランプの薄暗い明かりの中でエカタが目を開けました。そして部屋をゆっくり見回し、私の姿を認めた瞬間、ほほえんだように見えました。何か言いかけたようにも見えました。でも、すぐに2度3度と首を左右に振り顔を横に向け、また目をつむってしまいました。それっきり、何も反応しません。次の朝エカタ・ライはその命を終えました。意識のない中で最後のお別れをしてくれたのでしょうか。何を言いたかったのでしょうか。未だに分かりません。

(完)